



TITLE:

平松閑月翁遺詠

AUTHOR(S):

水野, 千里

CITATION:

水野, 千里. 平松閑月翁遺詠. 天界 1932, 12(133): 179-179

ISSUE DATE:

1932-04-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/161962>

RIGHT:

51090	dawdle	或は彗星ならん
51091	dazzle	多分彗星ならん
51092	deacon	彗星にはあらず
51093	dealer	或は遊星ならん
51094	debase	多分遊星ならん
51095	debate	或は星雲ならん
51096	decree	多分星雲ならん
51097	deface	その彗星を搜索したるも、見出し得ず(51223を見よ)
51098	defect	その遊星 $\frac{\text{ク}}{\text{ク}}$ (51223を見よ)
51099	defend	何卒(水星、金星、等)面上の紋様を観測せられたし
51100	defile	遊星——上の一紋様がグリニッチ日附——に中央線を通過す
51101	deject	何卒——彗星の尾に於ける變化を寫眞にて観測せられたし
51102	deluge	何卒——彗星の頭に於ける變化を観測せられたし
51103	dental	グリニッチ時——、火星表面の明き突出部明暗境界線に来る
51105	depict	本年に於ける出来る丈早い観測を何卒郵便にて送られたし
51106	deploy	本年に於ける成る丈け後い観測を何卒郵便にて送られたし
51107	depose	何れの観測にても宜しく郵便にてお送りを乞ふ

(續く)

平松閑月翁遺詠

水 野 千 里

1, 天 體 四 季

春。野に山にかゝる霞よ心して、夜はみ空の星なかくしそ。
 夏。てり續く晝の暑さも忘れけり、さやかに見ゆるみ星眺めて。
 秋。春雨や五月雨過ぎし秋の空、星見る友の世とはなりけり。
 冬。たへかたき霜も氷もよそにして、星眺めつゝ夜は更けにけり。

2, 星

夜あらし木々の梢はさわけとも、星の林は靜なるらむ。
 朝日さす空に輝くあか星の、西に光るそ年の星なる。
 敷島の道照る月ゆ我は尙、星さやかなる空をめてぬる。
 行越しつ遅れつ八つの惑ひ星、されと迷はぬ道はありけり。
 うは玉の闇こそよけれ大空の、數限りなき星の見ゆれば。
 寒さをも更るもしらす打あふき、夜すから星のみ名をときけり。
 大空にみちて輝く千萬の星、指しつゝ夜は更けにけり。
 照る月の影には消えてうは玉の、闇に輝く星の空かな。